

7. 精神障害者のステップアップキャンプ

特定非営利活動法人 キャンピズ

代表 石田易司

① キャンピズの概要

『Camp With』をスローガンに、キャンプやさまざまなレクリエーション活動を主催・サポートするNPO法人。主に障害がある人や児童、高齢者などハンディキャップを抱える人たちの野外活動を援助する活動を実施している。キャンピズの目標は、キャンプ等の活動を通じて、障害の有無、性別、年齢の区別なく人と人との信頼しあえ、お互いに助け合って生きていける社会を実現すること、としている。

徐々に活動範囲を広げており、現在は認知症高齢者対象のシニアキャンプや精神障害がある人を対象としたキャンプも実施している。こういったキャンプによって、参加者の社会生活能力の向上などの効果が見られた。この成果を日本キャンプ会議の学会などで会員が発表し、社会に対して障害者キャンプの必要性を訴えている。また、学生ボランティアやスタッフの資質向上のため、トレーニングキャンプも行っている。

② 精神障害者ステップアップキャンプの概要

このキャンプは、2005年から冒険プログラムの研究キャンプとして始まった。冒険プログラムが精神障害者にどう影響をするのか、プログラムにはどういった配慮点が必要なのか、などさまざまな課題のもと3年間という期限を設け、「四万十川をカヌーで川くだり」という一つの大きな目標を立て、手探り状態ながらスタートした。参加メンバーは、精神障害者サポートセンターの利用者・職員、学生スタッフ、社会人スタッフという顔並みで、4ヶ月に1回程のペースで実施した。

③ 精神障害者ステップアップキャンプの流れ

できるだけ参加者、スタッフを固定メンバーにし、長期的な目線でステップアップを感じられるようにしようとしたが、やはり参加者の調子には波があり、その時々で体調が整っている方が入れ替わりで参加することが多かった。しかし中にはキャンプに楽しさを見出し、ほとんど連続で3年間参加された方もいた。

初め、参加者はキャンプというものがどんなものか分からずキャンプを嫌がってさえいた。そんな中、第1回目のキャンプは宿泊を伴わない日帰りのデイキャンプから始まった。初回のプログラムは、アイスブレイク、野外での昼食(カレー)作り、ディスクゴルフを行った。参加者は、「アイスブレイクでお互いを知り、交流を深めたことが大きく、後のディスクゴルフでもそれが活き、学生と話が弾んだ。お互いが助け合って一つの事にチャレンジし、それを成し遂げる充実感があつた。」と後の振り返りで感想を述べた。参加者の利用す

るサポートセンターのスタッフは、「より身近な地域でそういう関係を築くことがこれからの課題でもあり、次回は少し今回より段階を経たチャレンジキャンプにしたい。」と第2回キャンプに向けて、ミーティングが開始された。

第2回からはデイキャンプと同じ場所での宿泊を伴うキャンプとなり、参加者と一緒に次のキャンプでは何がしたいかを話し合い、プログラムを作成していった。宿泊は野外活動センターの施設での宿泊だったが、他人と肩を並べて寝ることがほとんどなかった参加者は、緊張もあり眠れなかった等の問題も出てきた。しかし、「楽しかった」という感想を聞けるようになり、次回も参加するにあたってこの問題点をどう対処していけば良いか、等それぞれの自己管理面の意識も高まっていっているようだった。キャンプ後には振り返りを実施し、「自分にとって何がチャレンジだったか」を参加者それぞれに明確に出してもらい、自らの自身につなげていけるよう取り組んだ。

その後も、次のキャンプの行き先も参加者・スタッフ皆で話し合い、プログラムもさまざまなものに挑戦していった。そして第7回キャンプで、当初は「本当にできるのか？」と不安いっぱいだった四万十川をカヌーで川下りのプログラムの実施となった。キャンプ日数も延び、2泊3日で実施された。キャンプ1日目は豪雨に見舞われた中でのテント泊で、就寝場所もどうなるか分からない状況の中で参加者は、「どうにかなるだろう」と物事を捉えることができていた。2日目のメインの川下りも果敢にチャレンジし、自分が最後尾になってしまっている、沈没しても、「むちゃくちゃ楽しかった」という言葉で締めくくることができたのは、3年間を経てこそその言葉だったのだろうと思われる。



四万十川でのカヌープログラム

④ 精神障害者のキャンプの可能性

この精神障害者ステップアップキャンプは3年前に始まり、3年という長期間の影響もあり途中から体調面や就職などで来られなくなってしまった方も多かったが、参加者は1回1回のキャンプの中でも、継続的に見た場合でも、大きく変わったという印象を受ける。ただ単にキャンプをして「楽しかった」で終わりにするのではなく、終わった後にそのキャンプが自分にとってどうだったのか、どう感じながら参加していたのかを振り返り、次回はなにをしてみたいか、何をチャレンジとするのかを明確にして取り組むことで、参加者自身も改めて「自分の力」を知ることができ、自信につなげていけたのではないかと感じる。そして、振り返りの場で本人のチャレンジを皆で評価することによって、よりその効果は高まったのではないかと思う。実際に、包丁を握るのが怖かった人が、包丁を使って魚の腸取りができたことで大いに自信になったという声も聞くことができた。「自分たちでしなければ」というキャンプ独特の空気が参加者の自発性を促進しているように思える。そして、参加者各々がそれぞれの新しいチャレンジに取り組み、達成していった冒険プログラムが、達成感や自信を生み出す結果となったのだと感じる。

仲間同士で何かを成し遂げたり、体験を分かち合い共有することは、社会生活のシミュレーションになると言える。非日常の団体生活の中での人間関係がその人の本来持っている力に影響し、人間性をより豊かにしていく。そこに障害者キャンプの意義、可能性があると思われる。



夕食後、火を囲んでキャンプの振り返り

⑤ 決算報告書

助成金を使わせて頂いた、第7回キャンプの使途明細です。

(第7回キャンプ参加者：参加者・スタッフ合わせて13名)

収入	(単位：円)
大同生命厚生事業団助成金	200,000-
参加費(学生スタッフを除く10名分)	80,000-
支出	
カヌープログラム費	102,000-
交通費	80,000-
(高速道路通行料)	(48,000-)
(ガソリン代)	(32,000-)
宿泊費	43,000-
食事費	50,000-
雑費(物品購入費等)	5,000-
合計	280,000-